〈宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃記念〉

慶喜奉讃に起つ

池田 勇諦・楠 信生
金子 大榮・横超 慧日

――本書について――

本書は、二〇二一年四月五日に真宗本廟（東本願寺）にて開催された「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要　真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会」において、池田勇諦氏（同朋大学名誉教授）が「慶喜奉讃に起つ」という題で話された記念法話を掲載しています。また、宗門に属するお一人お一人の、二〇二三年にお迎えする慶讃法要の意義を問い尋ねる機縁となることを願い、「立教開宗記念法要〈二〇二一年四月十五日〉」での楠信生氏（真宗大谷派教学研究所所長）の法話を収載しているほか、付録としまして、一九七三年、五十年前の慶讃法要の折に寄稿された金子大榮、横超慧日両氏の文章を載せております。ぜひ合わせてお読みください。

〈目　次〉

本書について……iii

〈宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要
真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会　記念法話〉

慶喜奉讃に起つ　池田　勇諦

■はじめに……2

■「慶讃」の意味……3

■「私にとって」慶讃法要とは……8

■南無阿弥陀仏の所在……12

■自己と世界を貫く問題……18

■素晴らしき停滞……24

■根源的連帯に帰る……29

〈立教開宗記念法要法話〉

立教開宗の本義を尋ねて　楠　信生

■私にとっての立教開宗……34

■出発へもう一度立ち返る……35

■法要に向けた歩みの中で……38

〈付　録〉

・誕生のこころ……金子　大榮　44
・この時を縁として……横超　慧日　62

【凡例】

本文中の『真宗聖典』とは、東本願寺出版（真宗大谷派宗務所出版部）発行の『真宗聖典』を指します。

〈宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要
真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会　記念法話〉

慶喜奉讃に起つ

池田　勇諦
（同朋大学名誉教授）

《二〇二一年四月五日・真宗本廟　御影堂》

■はじめに

覚如上人が、『御伝鈔』の一番最後の一段で、「文永九年冬の比、東山西の麓、鳥部野の北、大谷の墳墓をあらためて、同麓より猶西、吉水の北の辺に、遺骨を掘渡して、仏閣をたて影像を安ず」（『真宗聖典』七三七頁）、このように、廟堂の創立について述べておられますが、時に一二七二年、それより数えまして、この真宗本廟創立七百五十年という記念すべき年を迎えているのであります。

この大切な時点において、その記念の大会とともに、明後年（二〇二三年）に迫りました慶讃法要のお待ち受け大会が持たれるということは、大変意義深きことと思います。と申しますのは、慶讃法要というの

は、その原点から申せば、本廟創立の精神に立ち返って、本願念仏の僧伽の伝灯に召される喜びとともに、背負う責任を確認するご法要だからであります。

加えてこんにち、新型コロナウイルス感染症の厳しい状況下にありますだけに、私たちのお待ち受けの覚悟のほどが強く問われる大会となりました。その意味で、今日こうして与えられた、この勝縁を皆さんと共に尽くさせていただきたいと念ずることでございます。

■「慶讃」の意味

さて、本題に入りますけれども、はじめに、この慶讃法要の「慶讃」

という言葉の意味について一言、確認をしてまいります。この言葉の元は、親鸞聖人の上に求めました場合、「正像末和讃」の中にあります「皇太子聖徳奉讃」、聖徳太子を讃えられるご和讃十一首。その第九首のところに、「慶喜奉讃せしむべし」（『真宗聖典』五〇八頁）と、明らかにこの四文字が見えておりまして、これがその元と言えるのでありましょう。

ですから、これをもって言えば、「慶讃」の「慶」というのは「慶喜」。「讃」は「奉讃」。では、その意味はどうなのかと申しますと、親鸞聖人が、この「慶喜奉讃」の四文字にわざわざ、お左仮名（左訓）を打っておられます。「よろこびてほめたてまつるべしとなり」。

となりますと、その「よろこび」とは何なのか。これも親鸞聖人が『一念多念文意』の中に、慶喜の言葉をご解釈になりまして、「「慶」は、うべきことをえて、のちによろこぶこころなり」。乃至、「これは、正定聚のくらいをうるかたちをあらわすなり」（『真宗聖典』五三九頁）と、はっきりとお確かめになっているのであります。このことからいたしまして、明らかに本願の喚びかけに喚びさまされた知恩の感動を表すものに違いございません。そして続く「奉讃」は、その知恩の感動に必然する報徳の歩みを表すものといただけます。

「恩徳」に報いるということを、「奉讃」、「ほめ奉る」とおっしゃっておられるのですが、「恩徳をほめ奉る」とは、どういうことなのでしょ